

言葉を使って思いを伝え合う力を高める授業実践

－国語科（小学校2年）「話すこと・聞くこと」の指導の系統－

M12EP009

内藤茂樹

1. はじめに

この研究の始まりは、これまでの現場での経験から感じている児童の様子からだった。

- 自分の言いたいことが相手に伝わらない。
場合によってはそれによってトラブルになる。
- 言いたいことがあるが、言葉として言い表せない。
- 言いたいことから思いついた順に話してしまい伝わりにくい。
- 自分の考えを言うことはできるが、言いつばなしで、話し合いにならない。

など、伝え合いがうまくいっていないことが挙げられる。あと少し言葉を足せば伝わるのに、もう少し順序良く話せば伝わるのに、ということがよくあった。

そんな児童に対して、相手に自分の思いを伝えられることの良さを知ってほしい、また、相手の思いを受け止めることの大切さを知ってほしいと考え研究を進めた。

伝え合う力を高めるということについては、学習指導要領の国語科の目標に「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。」と示されている。また、伝え合う力を高めるために必要な言語能力を育成することに関わって、言語活動の充実が総則に明記され、各教科・領域での言語活動例もたくさん示されている。このように、伝え合う力は、国語科はもちろん他の教科・領域や日常の生活場面でも必要となる力である。そして、事実や考えを伝え合い、コミュニケーションをとることができる児童の育成が求められているのである。

そこで、昨年度は、小学校5年生国語科において授業実践を行い、伝え合う力を高める手段（主に「話すこと」にかかわる手段）を探った(内藤 2013)。それを受け、今年度は、所属学年の小学校2年生における国語科の「話すこと・聞くこと」における指導の系統性を研究し、年間を通して指導をしていくことで、伝え合う力の育成に取り組むことを課題とした。

2. 研究の目的

- (1) 国語科（小学校2年）における「話すこと・聞くこと」の指導の系統性を、その土壌を耕す方策とともに明らかにする。
- (2) 指導の系統性を生かした授業実践を通年で行い、児童の「伝え合う力」の高まりを検証する。

本研究では、伝え合う力とは、「言語を通して自分が伝えたいことを相手に伝えることができる力」、「言語を通して相手の伝えたいことを理解できる力」と捉えたい。

3. 研究の方法

所属校である公立T小学校の2年(21名)の児童を対象とする。

- (1) 国語科（小学校2年）の教科書「こくご 二上 たんぼぼ」「こくご 二下 赤とんぼ」（いずれも光村図書）をもとに、「話すこと・聞くこと」の能力にかかわる指導内容を単元ごとに拾い出す。また、その指導内容の系統性について考察する。（指導時期、指導順序、指導内容のかかわりを見る。）
- (2) (1)によって明らかになった指導の系統性

を生かした授業実践を通年で行い、児童の「伝え合う力」(話し方・聞き方)の変容を検証する。その際、授業の中に「伝え合う場」を設定し、その場面での児童相互のやりとりを観察・分析するため、次の3つの単元に焦点を合わせる。

◆授業実践

①『あったらいいな、こんなもの』(光村図書「こくご2年上たんぼぼ」)

②『友だちのこと、知りたいな』(光村図書「こくご2年下赤とんぼ」)

③『今週のニュース』(光村図書「こくご2年上たんぼぼ」→通年での取り組み「朝の会でのスピーチ」)

特に①②は、今回検証のために授業実践を行った2つの単元であり、児童の伝え合う力が変容しているかを見るために、ビデオやICレコーダなどの機器を活用し、分析した。③についてもICレコーダで記録・分析した。

4. 研究の内容と分析

(1) 国語科(小学校2年)における「話すこと・聞くこと」の指導の系統性

国語科(小学校2年)の教科書「こくご 二上 たんぼぼ」「こくご 二下 赤とんぼ」(いずれも光村図書)の内容を単元ごとに見ていくと、予想以上に、「話すこと・聞くこと」の能力にかかわる指導内容が随所に盛り込まれていることがわかる。(【表1】参照)

学習指導要領にある小学校1・2年生の「話すこと」の指導事項は「相手に応じて、話す事柄を順序立て、丁寧な言葉と普通の言葉との違いに気をつけて話すこと。」と「姿勢や口形、声の大きさや速さなどに注意して、はっきりした発音で話すこと。」の2つである。前者は話すときの内容構成面に関する指導事項で、後者は話すときの音声技術面に関する指導事項である。

【表1】:小学校2年生の「話すこと・聞くこと」に関わる指導の系統

(参考図書:光村図書「こくご二上たんぼぼ」「こくご二下赤とんぼ」)

注:太字・斜体・下線は今回実践に生かした内容

指導時期	単元名	教材名	「話すこと・聞くこと」の能力に関わる指導内容
4月上旬	音読しよう	ふきのとう	【※1】音読するときに気をつけること ・しせい ・口のあけかた ・こえの大きさ ・腹をはやさ
4月中旬	書くことをきめてしらせよう	今週のニュース (授業実践③)	【※2】書く内容として ・いつ ・どこで ・だれが ・どうした
4月下旬	読んでわかったことをまとめよう	たんぼぼのちえ	【※3】わけをせつめいする言い方 ・どうしてかという。――からです。 ・なぜかという。――からです。 ・それは、――からです。
5月中旬	きろくしよう	かんさつ名人になろう	【※4】ていねいなかんさつ ・大きさや形、色を見る。 ・いろいろなぼうから見る。 ・数を数える。 ・ながさをはかる。 ・さわる。 ・においをかぐ。
6月上旬	だいたいなお話をきいたり聞いたりしよう	ともこさんはどこかな	おしらせを話すとき ・ゆっくり話す。 ・だいたいなことがわかるようにはっきり話す。 ・だいたいなことをきいて話す。
6月下旬	お話を読んでかんそうを書こう	スイミー	かんそうのことは(※6と関連) ・たのしかった。 ・どきどきした。 ・うれしい気持ちになった。 ・すっきりした。 ・こころにのこった。 ・おもしろかった。 ・たとえをつかった言い方 ・――ような ・――みたいな
9月上旬	はっぴようしよう	あったらいいなこんなもの (授業実践①)	【※5】はっぴようの組み立て ・はじめ「中」おわり ・話すじゆんじよを考える ・形や色や大きさ(※4と関連) ・はたらき ・考えたきかけやわけ(※3と関連) ・みんなに聞かせる話し方(※1と関連) ・こえの大きさ ・どこを見るか ・話すはやさ 【※6】かんそうやしつもん ・いいと選ったところ ・じぶんだったら ・べつのものでくらべて ・話し方 ・もっと知りたいこと ・わからなかったこと
9月下旬	読んで考えたことを書こう	どうぶつ園のじゅうい	じゅういさんのしごとをじゆんばんにまとめる。 (※2と関連) ・いつ ・どうした ・どうしてそうするのか(わけ) ・ひきつけられるとは ・はじめて知ったことにおどろく ・ふしぎに思ったり気になったりする ・もっと知りたいなあと思う 【※7】「いつもすること」と「ある日とくべつにしたこと」を分ける
10月下旬		主語と述語	主語と述語があいてにきちんとつたわるように ・もっと知りたいときの聞き方
11月上旬	しょうかい文を書こう	友だちのこと知りたいな (授業実践②)	・いつからですか。 ・どうしてですか。 ・どうやって――ですか。 ・どれがいちばん――ですか。

11月中旬	読んでせつめいのしかたを考えよう	しかけカードの作り方	わかりやすくせつめいするためのくふう ・みだしてあげる ・しやしんをつける ・じゆんじよをあらわすことばをつかう
1月上旬	ことばについて考えよう	ようすをあらわすことば	擬態語や形容詞、比喩
1月中旬	詩を書こう	見たことかんじたこと	ようすのあらわし方(※3と関連) ・何のどんなようすが見えるか。 ・どんな音がするか。 ・どんなにおいがするか。 ・さわつたらどんなかんじがするか。 ・食べものだったらどんなあじがするか。
2月上旬	すすんで考えを出し合おう	みんなできめよう	話し合うときは ・すすめる人をきめる。 ・考えたことをすすんで話す。 ・話している人を見て聞く。 ・さいごまで聞いてから話す。 ・きかれたことに答える。
2月下旬	読んだお話をしようかいしよう	スーホの白い馬	友だちによんでほしい本をしようかいする。 ・だいめい ・さくしゃ ・どんなお話か ・すきなところ ・おもしろいと思うところ

【表1】を見ると、4月上旬の学年の最初には、姿勢・口の開け方・声の大きさ・読む速さといった音声技術面に関わる指導内容が入れられている。話すことにおいて、やはりまず大切なことは音声技術面であるということだろう。話す内容を決め、相手に伝えるためには、一音一音をはっきりとした発音で話すことが大切である。姿勢や口形を身につけることは、安定した発声や明瞭な発音の基礎となる。また、声の大きさや速さに注意することも、音声化するときの基礎を養うものである。1・2年生という発達段階(=入門期)を考えると、丁寧な指導が求められるところである。

その後の単元を見ていくと、内容構成面に関わる指導内容が多くなっている。1・2年生の指導事項として「話す事柄を順序立て」ということが挙げられている。これは、順序に沿って事柄を具体化することである。その具体化を図るために必要となる言葉や言い方が提示されている。例えば、理由を説明する言い方、感想の言葉、順序を表す言葉、様子を表す言葉、例えを使った言い方といったものである。

また、各単元を通して指導した内容を生かして行う単元も随所に設けられている。それは今回検証のために授業実践を行った2つの単元もそうである。各単元の指導内容を関連づけて指導していくことで児童への定着が図

れるということである。よって、一時的な指導で終わることなく、系統性を自覚して、継続し、繰り返し指導していく必要がある。2年生という段階で学ぶ内容は、児童のその後の言語活動を支える大切な内容が多くなっているということを感じる。

(2) 国語科(小学校2年)の指導の系統性を生かした授業実践による検証

①「あつたらいいな、こんなもの」(光村図書『こくご二上たんぼぼ』)

目標

- ◎自分が考えた「物」について、相手にわかるように、話す事柄や順序を考え、声の大きさや速さなどに注意しながら、はっきりした発音で話すことができる。
- ◎大事なことを聞き落とさないようにしながら友達の話の聞き、感想を述べたり質問をしたりすることができる。

内容

自分が考えた「あつたらいいな」というものを、友達に説明する。(その際、自分で描いた絵を提示しながら説明するようにする。)

【表2】:学習内容と指導の系統性【表1】との関わり

時	学習内容	指導の系統【表1】
1	学習の見通しを持つ。	
2	「あつたらいいな」と思うものを考える。	
3	「あつたらいいな」と思うものを1つ選ぶ。	
4	「あつたらいいな」と	※4:丁寧な観察(形、色、大きさ、はたらき) ※3:理由を説明する言い方 ※5:発表の組み立て(はじめ・中・終わり) ※1:音読で気をつけること(声の大きさ・速さ・視線)
5	思うものについて詳しく考える。(絵と言葉を使う)	
6	話す材料を選ぶ。	
7	話す順序を考える。	
8	発表の練習をする。	
9		
10	発表会を開く。	※6:感想や質問
11	自分の発表を振り返る。	
12		
13		
14		

エ]

◎友達のよいところを見つけ、必要なことをメモすることができる。【書（1）ア】

内容

友達のよいところを見つけ、クラスの友達に紹介をする。

【表3】:学習内容と指導の系統性【表1】との関わり

	学習内容	指導の系統【表1】
1	「これはだれでしょうクイズ」をする。 「友だちのこと、知りたいな」の P.26 の文を読んで、学習の計画を決める。	
2	「友だちのこと、知りたいな」の P.28 を読み、友達を紹介するための観点を整理する。 紹介する友達のよいところを見つける観点を参考に思い出し、「友だちよいところメモ」に書き込む。	※2：いつ・だれが・どこで・どうした
3 4	紹介する友達についてもっと知りたいことを考え、友達や先生に質問し、「友だちよいところメモ」に書く。	
5	「友だちよいところメモ」を整理し、友達のよいところを紹介する「発表メモ」をつくる。	※5：発表の組み立て（はじめ・中・終わり） ※3：訳を説明する言い方
6	発表メモをもとに小グループで「友だちのよいところしょうかい」の構成や話し方について考え、それを全体で交流し合う。	※7：いつもすることとある日特別にしたことを分ける ※1：音読で気をつけること（声の大きさ・速さ・視線）
7 8	「友だちのよいところしょうかい」（クラスの友達に発表）をする。また、紹介を聞いて、感想を伝え合う。	※6：感想や質問

9	発表の様子を振り返り、友達のよいところがみんなに伝わったか確認する。また、紹介された自分のよいところを振り返り、感想を伝える。	
---	---	--

◆伝え合いの場の設定

「友だちのよいところ紹介」を聞いて、それに対する感想を言ったり、質問をしたりする場を設けた。質問対象については、紹介する人あるいは紹介される人どちらでもよいこととした。

◆話し方や聞き方の意識づけ

「話し方・聞き方あいうえお【図1】」をもとに気をつけることを確認させた。

◎児童の達成状況(指導の系統性との関連で)

いつ、だれが、どこで、どうした（【表1】※2）という事実を明確にメモすることができた。発表の組み立て（【表1】※5）については、前述の実践①「あったらいいな、こんなもの」と同じく、「中」の部分を児童が自分で順序を考えた。その中で、「いつもすることとある日特別にしたこと」を分けたり、自分が知っている事実と人から聞いたこととを区別した言い方（「～だ。」と「～だそうだ。」）で話したりすることが児童から提案され、全員でそれを採り入れることにした。

◎伝え合いの場の設定

今回の伝え合いは、前述の実践①での伝え合い＝話し手1人対聞き手複数とは違う形になった。それは、話し手1人（紹介者）対聞き手1人（被紹介者）対聞き手複数（その他の友達）というトライアングルのつながりになったからである。聞いているときは、聞き手2者ともに高い関心をもって聞くことができていた。特に被紹介者は高い関心を寄せて聞いていた。感想や質問になると、紹介された事柄をもっと詳しく知りたがる聞き手複数

(その他の友達)と聞き手1人(被紹介者)とのやりとりが多くなった。この2者は互いに自分の考えたことを言葉で話して伝え合うことができていた。また、話し手1人(紹介者)にとっては、感想をもらうことだけでなく、聞き手1人(被紹介者)への質問が多いことによって、自分の話した内容が聞き手に伝わったことがわかる結果となった。感想【表1】※6については、紹介された友達と自分とを比べて共通点や相違点を話すことができた児童がいる。話し手にとっても、聞き手にとっても思いがよく伝わったことがうかがえた。

◎話し方や聞き方の意識づけ

「話し方・聞き方あいうえお」(【図1】)をもとに自己評価をしたことは、前述の実践①と変わらない。しかし、前述の実践①の際に自分の話し方を客観的に見ることの難しさがわかったので、今回は、話し方を撮影したビデオ映像を児童に見せてから自己評価をさせた。その結果、「相手を見て話す」の項目に対する評価が前回よりもかなり低くなっていた(◎の数が11→5)。これは、映像で見ることで、自分が意識していたよりも視線が相手の方に向いていないことに児童が気づいた証拠だと思われる。教師の側から見た評価と児童の自己評価との隔たりが少なくなった。逆に「笑顔で話す」の項目に対する評価は前回よりも高くなっていた(◎の数4→10)。これは、話す内容が自分のことではなく友達のことであったことが大きな要因と考えられる。自分のことを話すときには照れくさかったり、恥ずかしかったりするものである。しかし、友達のこと、しかも友達のよいところを話すと言うことで、自然と笑顔になったのではないかと考える。

例えば、A児の場合、音声技術面(【表1】※1)においては、1学期の話し方では、視線は下を向き加減で、声の大きさも少し自信

がないような感じだった。2学期になると徐々に、友達の方を見て、クラス全員にしつかりと聞こえるような声の大きさになっている。この授業の発表時においてもそうであった。そして、聞いている友達の方を見て、笑顔で話す様子が見てとれた。「話し方あいうえお」(【図1】)の意識が高まったことがうかがえる。また、次に述べる「朝の会」での実践③も含めみんなの前で話す機会を多くしたことで、自分の思いを話すことに自信を持つことができたのではないかと思われる。実際、その成果は、国語という教科の中だけではなく、11月2日に行われた学校行事の学習発表会という特別活動の場でも表れた。クラス発表のナレーターに自ら立候補し、しかも、クラス発表の第一声を担当したのである。その第一声は、全校児童、保護者、地域の人々等多くの観客を見て、大きな声で、ゆっくり、最後まではっきりと話すことができたのである。クラス発表を終えたときのA児の表情は、とても充実したものであり、自分が伝えたいことを相手に伝えることができた喜びを実感していたのではないかと見てとれた。

③通年での取り組み(朝の会「今週のニュース」)

4月中旬の単元で「今週のニュース」(「こくご2上たんぼぼ」)を実施したのを受け、これを通年での取り組みとして、毎日朝の会の中で日直担当の児童が「今週のニュース」を話す場面を設定した。「いつ・どこで・だれが・どうした」に「どうだった(感想)」を入れて話し、それを文章にして学級掲示板コーナーに掲げるように指導した。また、聞き手である児童は、有志が話の感想をメモに書いて同様にするようにした。ここでは、前述のA児の1学期と2学期での話の内容やそれに対する有志の感想の内容を比較しておきたい。

◇6月のA児の話

「17日にディズニーシーに行って、トイ・ストーリーマニアに乗って、隣のゲームセンターに行きました。」

◆感想

「何のゲームをしたのかな。」

◇10月のA児の話

「前、百円ショップに買い物に行って、買い物が終わって外に出て、目の前に救急車が来て、窓から見たら女の人が倒れていました。怖かったです。終わりです。」

◆感想

「こわかったね。」

「すごくこわいね。わたしもこわいよ。」

◇12月のA児の話

「昨日、ライフガーデンの百均に行って、お父さんが何か探していたから、「何探してるの？」って言ったら、「何探してるのかな？」ってお父さんが言って、「教えてよ。」って言ったら、「いやだ。」って言われました。」

このA児の場合、まず、内容構成面では、1学期から「いつ・どこで・どうした」(【表1】※2)ということは話すことができているが、さらに2学期になると、「怖かったです。」と、どう感じたかという感想が入れられるようになってきている(【表1】※6)。また、さらに12月には驚くべきことに、話のなかに実際にあった会話を入れて、その場面を生き活きと伝えることができるようになっていた。なお、「今週のニュース」の実践では、当初は児童が文章を事前に用意してそれを基に発話する形式をとっていたが、その後、まず口頭発表してそれを文章にする形式へと変更した。そのことによって、文章も生き活きとしたものとなった。

また、今週のニュースでのA児の話に対する有志の感想を見てみると、1学期は内容を詳しく知りたい質問だったのに対し、2学期は、A児の気持ちに対する感想を伝える内容になっている。事実を伝えることだけでなく、

A児の思いが聞き手である友達に伝わり、その思いに対して聞き手が自分の思いをA児に返していることがわかる。短い言葉ではあるが、伝え合いが成立しているということが言えよう。

A児以外の児童についても同様のことが言える。事実や出来事だけでなく、自分の思いを相手に伝えるようになってきている。また、有志からの感想や質問の内容を見ても、発表者の思いを理解した上で、その思いに共感するものが多くなっている。

5. 成果と考察

3つの実践を通して得られたこととしては、以下の4点が考えられる。

○話し方の内容構成面については、各単元の指導内容を継続し、繰り返し指導していくことが大事であること。

○話し方の音声技術面については、より客観的な自己評価を促すため、ビデオなどで映像を記録し利用することが有効であること。

○伝え合うためには、聞き手がきちんと内容を理解できることが大切であること。そのための一歩として、「聞き方あいうえお」のような聞き方の具体的な姿(型)を提示することも1つの有効な手段である。

○話す・聞くあるいは書く・読むことで言葉を使って思いを伝え合う場面を意図的に多く設けることで、児童は、どうすれば相手に思いが伝わるかを経験から学んでいくことができるということ。

こうした系統性を活かした国語科授業実践で、言葉を使って自分の思いを伝えることの楽しさを児童が味わい、もっと話したい、もっと聞きたいと思えるようにするための手がかりを得ることができたのは幸いだった。

「今週のニュース」活動でのA児の変容については既に論じたが、「友だちのこと、知り

たいな」の単元におけるA児の話し方を見ると、聞き手を意識したもので、思いが伝わったことを実感しているように見える。それは、発表時のA児の視線・声の大きさ・表情に表れている。視線については、メモをたまに見ながら内容を確認し、できるだけ友達の方を見て話している。その友達の中には隣にいる被紹介者も含まれる。自分が紹介している友達がどんな表情で聞いているかを確認しているようにも見えた。声の大きさについては、教室の後方でも十分聞こえる大きさで、はっきりと話していた。そして、表情も最初は若干緊張気味であったが、被紹介者や聞き手である友達の反応を見て、次第に笑顔が出るようになっていた。

じつは、「友だちのこと、知りたいな」(光村図書『こくご二下赤とんぼ』)という単元は、その取り扱いに特に難しさを抱えるものでもある。たとえば、紹介者と被紹介者の組み合わせにしても、自由にして結果として誰も紹介者がいないという児童も出てきかねず、他方授業者の形式的な押し付けでは紹介する意欲を削ぎかねない(今回は、3・4時において一人が複数の候補について紹介案を練る作業の中で、周到に授業者が全体を調整した。)。また、学級内の人間関係がぎくしゃくしていれば紹介内容で傷つく児童も出かねない。

そこで、一番大事なのは、まず学級経営も含め児童相互の信頼関係が耕されていて、「いいところ」を善意で紹介したい、みんなに知らせたい、また紹介されることに安心感がある、友達のことを知りたい、という状態があることである。つまり、その学習活動にその必然性(authenticity)とその基盤があることである。その意味では、単元「友だちのこと、知りたいな」は、学級づくりが試される場であり、今回の場合特に朝の会での「今週のニュース」の活動の持続が基盤となって成立したものであったと位置づけられる。

6. 今後の課題

言葉を使って自分の思いを伝え合う力を高めるためには、話すにしても聞くにしても、書くにしても読むにしても、まず言葉を知らないことには始まらない。今回は主に話す・聞くことによる伝え合いに焦点をあててきた。特に話して思いを伝えるためには、場面に合った言い方を知っておくことも大切であるが、語彙が豊富であることも重要であると感じた。語彙を豊富にするには、国語科だけでなく、他の教科・領域などで一つ一つの言葉に関心をもっていくようにすることが必要である。

最後になりますが、昨年度、今年度と大変お世話になりました実習校の校長先生はじめ諸先生方に心から感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

7. 引用文献, 参考文献

- 秋田喜代美(2006)『改訂版 授業研究と談話分析』NHK出版
- 秋田喜代美(2010)『教師の言葉とコミュニケーション』教育開発研究所
- 村松賢一(1999)「日常語の精練をへてパブリックな日本語を確立する」全国大学国語教育学会発表要旨集 99, 192-195
- 内藤茂樹(2013)「言葉を使って思いを伝える 国語科授業実践」山梨大学教職大学院教育実践研究報告書
- 山元悦子(1996)「対話指導のための基礎的研究—対話展開力をとらえる指標—」福岡教育大学紀要 45, 第1分冊, 27-42
- 米山誠(1986)「話すことの学習指導について—学習意欲を高めるための試み—」名古屋大学教育学部附属中高等学校紀要 31, 52-57
- 文部科学省(平成20年8月)『小学校学習指導要領解説 国語編』